

平成30年6月27日現在

機関番号：32629

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370330

研究課題名(和文) トランス・アメリカ 19世紀アメリカと環カリブ海地域との文化交渉と文学的想像力

研究課題名(英文) Trans-America: Nineteenth-Century American Literary Imagination and its Relation to the Circum-Caribbean

研究代表者

庄司 宏子 (Shoji, Hiroko)

成蹊大学・文学部・教授

研究者番号：50272472

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀半ば以降のアメリカ合衆国と環カリブ海地域との関係が、文学的想像力に及ぼした影響を考察した。具体的には、19世紀アンテベラム期のアメリカの国家の自己イメージの形成と1791年に始まるハイチ革命との関わり、ハイチ革命がアメリカ南部の奴隷制度に及ぼした影響、ジェファソン政権に始まるアメリカのハイチ非承認の言説に注視しながら、ハイチ革命がアメリカの文学的想像力に及ぼした影響をエドガー・アラン・ポーの文学の言説のなかに辿った。併せて、現代にも続くアメリカとカリブ海地域とのコロニアリズム/ポストコロニアリズムの関わりを、ジャマイカ系アメリカ人のミシェル・クリフの小説に辿った。

研究成果の概要(英文)：This study deals with the relationship between Antebellum America and the Circum-Caribbean and its influence over the nineteenth-century U.S. literary imagination. The Haitian Revolution that started in 1791 and ended in the birth of a black republic in 1804 exerted a significant impact over the post-revolutionary United States and its nation-building as a white Anglo-Saxon republic. The impact of the Haitian Revolution was especially seismic in the slave-holding U.S. South and this impact is explored in the narratives of Edgar Allan Poe. This study also addresses the remains of colonialism and the emergence of neo-colonialism in the U.S.-Caribbean relation in the contemporary American literature and discusses colonial and post-colonial themes in the novels by the Jamaican-American novelist Michelle Cliff.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：エドガー・アラン・ポー ミシェル・クリフ ハイチ革命 奴隷制度

1. 研究開始当初の背景

1978年のエドワード・サイードの『オリエンタリズム』を起点とするポストコロニアリズムは、近年のグローバリズムのなかでのナショナリズムや新たなる植民地主義の台頭により、その批評的意義は大きく、批評理論としての精緻さも増している。1980年代以降、カリブ海諸国出身のアメリカ作家が登場してきているが、ポストコロニアリズム批評が文学研究の場でその真価を発揮する状況には至っていない。19世紀前半から現代にいたるアメリカ文学研究をカリブ海地域との歴史的関わりにおいて問い直し、奴隷制度や植民地支配など、共有された歴史がいかにかに文学的想像力に影響を及ぼしているのかを問い、文学研究をネイション・ステイトの一国的関心からではなく、ひとつの文化圏として問い直す研究方法を構築しようとする。

(1) 18世紀末から19世紀半ばにかけてキューバ、プエルトリコ、メキシコなど中米およびカリブ海地域との政治的・経済的・文化的接触を増したアメリカでは、この地域に関する小説、旅行記、日記が書かれるようになる。この時代に「帝国」としての姿を現し始めたアメリカは、カリブ海地域との間にさまざまなネットワークを築く。この時期に書かれた文献から、このネットワークのなかで繰り広げられた政治的・文化的交渉の足跡を辿ることができる。アメリカ文学研究者のRobert S. Levineは、19世紀初めのチャールズ・ブロックデン・ブラウンの『ルイジアナ・パンフレット』やフレデリック・ダグラスのブラック・ナショナリズムを論じる際には、「環大西洋」の視点が必要だという。同様に、テキサス併合やメキシコやカリブ海地域への進出において顕著となるアメリカの拡張主義やナショナリズムの台頭の時期に描かれたアンテベラム期の小説や旅行記などを論じる際にも、アメリカからカリブ海地域、さらにアフリカにも及ぶ文学的想像力の

範囲を想定して、これを一つの言説空間の圏として捉える「トランス・アメリカ」の視点が必要である。

(2) 従来のアメリカ文学研究においては、アンテベラム期に台頭するアメリカの国民国家および帝国化とアメリカ文学との関連については、ヤング・アメリカ運動とアメリカ・ルネサンスの研究が西漸運動との関連から論じられるなど、西部フロンティアとの関係を扱うものが主であった。そのため、アメリカの「南」、すなわちカリブ海やラテン・アメリカとの政治的・文化的交渉とそれが文学的想像力に及ぼした影響を論じる研究は未開拓であったといえる。しかし、この時期のアメリカは、キューバやプエルトリコなどのスペイン領カリブ海植民地に対する経済的・帝国主義的関心を強めていた。キューバやプエルトリコは1830年代からアメリカ人の保養や転地療養の地となり、キューバには島の東部を中心にアメリカ資本による砂糖やコーヒーのプランテーション経営が行われるなど、急速に経済的関係が強化されていた。

(3) またカリブ海地域は、奴隷制度をめぐるアメリカ国内の自由州と奴隷州との利害や緊張が投影される空間であり、この地域との接触はその時々アメリカの国内状況を映し出していた。その傾向は、1823年のモンロードクトリン以降、一層顕著となる。元々カリブ海地域は地理的近接や奴隷制度の共有という点から、歴史的にアメリカ南部とのつながりが強く、南部の政治家のなかには国内の自由州に対する劣勢から脱するため、メキシコからカリブ海地域に南部の壮大な帝国を築くべく、この地域に革命煽動をする者もいた。また北部の政治家にも、カリブ海への経済的拡大と南部の慰撫のためキューバ併合を唱える者もあった。南北戦争以前のアメリカでは西方への拡大はもとより南方への拡大も盛んであったといえる。19世紀半ばの

アメリカのこの地域への帝国主義的関心と同時代の文学的言説がどのように関わっているのか、当時カリブ海地域を描いた小説、旅行記、日記のなかに国家の領土拡張のイデオロギーに対する同調や批判性を読み取るうとする研究は、それ自体が未開拓で魅力的な研究テーマである。また本研究は、植民地時代から現代まで続くアメリカ合衆国と中南米およびカリブ海地域との関係、アメリカのこの地域に対する政治、資本、文化による支配といった帝国的ふるまいに関して、これを歴史的視座から批評的に検証し、現代のグローバルイゼーションにみられる新植民地主義の構造の分析にも繋げようとする研究関心を有する。

2. 研究の目的

本研究は、19世紀半ばのアメリカ合衆国が、自国の南方に位置する環カリブ海地域に対して行った併合や経済的支配の野心を秘めた帝国主義的進出が、同時代の文学的・文化的想像力にどのような影響を及ぼしたのか、ポストコロニアリズムの視点から考察しようとするものである。具体的には、19世紀アンテベラム期のアメリカの帝国化と国家の自己イメージの形成が、ハイチ革命などカリブ海地域との関係において構築されたことを、アメリカ南部の奴隷制度の動向に注視しながら文学的言説のなかに辿る。併せて、現代にも続くアメリカとこの地域とのコロニアル／ポストコロニアル的関係の起源を建国初期に遡って検証し、現代アメリカに向けられる「唯一の帝国」論を歴史的視座から批評的に検証することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、アメリカ合衆国が西漸運動へと向かう19世紀半ば、自国の南方の環カリブ海地域とどのような政治的・文化的交渉を持っていたか、アメリカの帝国主義的関心と同時代の文学的・文化的言説との連動を考察す

る。アメリカ文学研究が研究対象としてきた領域を拡大し、奴隷制度と植民地支配という共有の歴史をもつカリブ海地域との関わり、また19世紀末からアメリカのこの地域への帝国主義的進出との関わりにおいて読み解く。本研究は、ポストコロニアリズム批評により、アメリカとカリブ海地域を一つの連続する文化的地勢と捉え、そこに形成された文学的想像圏をトランス・アメリカの文学史・文化史として記述する。

4. 研究成果

本研究の研究成果として、論文ではアメリカ初のヴァンパイア小説とされる1819年出版のロバート・C・サンズの「黒いヴァンパイア——サント・ドミンゴの伝説」を取り上げ、ハイチ革命以前のサン＝ドマングを舞台に黒人と白人の混血の人物をヴァンパイアとする造型を、またエドガー・アラン・ポーの「赤死病の仮面」および「黄金虫」に。建国初期のアメリカ合衆国でハイチ革命とその余波とその恐怖がいかに関連しているかを論じた。近代のヴァンパイア小説は、1819年のジョン・ポリドリの「吸血鬼（“The Vampyre”）」を嚆矢とするが、ハイチ革命とアメリカ文学との関わりが、アメリカ初のヴァンパイアに結実していることの発見は、本研究の大きな成果である。

またミシェル・クリフの1993年の小説『フリー・エンタープライズ』にアメリカとカリブ海地域をつなぐ国境を越えた反奴隷制運動のつながりが想像／創造されていることを論じた。これらの論文は、今年出版される共著本に収録される予定である。

学会発表として、エドガー・アラン・ポーの小説にみられるサン＝ドマングの奴隷反乱の影響についての論考のドラフトを、国際的な学会 International Poe and Hawthorne Conference に応募し、採択された。この学会発表は2018年6月23日に行った。また Michelle Cliff に関する論考のドラフトを、

これも国際的な学会 Caribbean Women (Post) Diaspora Interconnections に応募し、採択された。この学会発表は、2018年7月に行う。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 4 件)

- ① Hiroko Shoji, “ ‘Le gens inconnu’ as a Strategy of Resistance - Post-Diasporic Identity in Michelle Cliff’s *Free Enterprise* ”, Caribbean Women (Post) Diaspora: African-Caribbean Interconnections, July 13, 2018.
- ② Hiroko Shoji, “Figuring Contagious Blood in Edgar Allan Poe’s ‘The Masque of the Red Death’ ”, International Poe & Hawthorne Conference, June 23, 2018.
- ③ 庄司宏子、「Jonkonnu/Gens Inconnu - Michelle Cliff, *Free Enterprise* におけるポストコロナル・アイデンティティ」日本アメリカ文学会東京支部、2016年9月24日。
- ④ 庄司宏子、「ハイチという妖怪——Robert C. Sands の “The Black Vampyre, or a Legend of Saint Domingo” にみるムラートの表象」(Symposia 文学/映像における〈情動〉の再定位)、日本英文学会第88回全国大会、2016年5月29日。

[図書] (計 3 件)

- ① 庄司宏子、「『仮面舞踊』から『正体のしれない人』へ——ミシェル・クリフ『フリー・エンタープライズ』論『ネイションと文学：グローバリゼーションのなかで』(仮)に所収。作品社、2018年9月末ないし10月刊行予定、共著、352ページ(見込み)。
- ② 庄司宏子、「ハイチという妖怪——ロバート・C・サンズの『黒い吸血鬼——サント・ドミンゴの伝説』にみるムラートの表象」『憑依する英語圏テキスト』に所収。音羽書房鶴見書店、2018年8月刊行予定、共著、総ページ(未定)。
- ③ 庄司宏子、彩流社、『アメリカスの文学的想像力——カリブからアメリカへ』、2015年、351ページ。

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織
(1) 研究代表者
庄司宏子 (SHOJI, Hiroko)
成蹊大学・文学部・教授
研究者番号：50272472

研究者番号：

(2) 研究分担者 ()

研究者番号：

(3) 研究協力者 ()